

ダイヤーの『ローマの廃墟』

海 老 澤 豊

ウェールズ出身の詩人・画家ジョン・ダイヤー (1699-1757) が遺した作品はそれほど多くない。出世作となった眺望詩「グロンガーの丘」(1726) は、初め不規則なスタンザ形式を持つピンダロス風オードとして書かれたが、¹⁾後にミルトンの「快活の人」と「沈思の人」に倣った四歩格のカプレットで書き直され、²⁾最終的には若干の変更を加えて『ダイヤー詩集』(1761)に収められた。³⁾またダイヤーは1724年から翌年にかけてイタリアに絵画修行に赴いたが、その成果である『ローマの廃墟』が出版されたのは1740年のことであった。⁴⁾さらにブランク・ヴァースで書かれた全四巻の農耕詩『羊毛』(1757)は彼の遺作となった。⁵⁾上記の『ダイヤー詩集』に収録されたのは、わずかにこれらの三篇にすぎない。ただし19世紀半ばにダイヤーの子孫が種々の1次資料を公開し、現代の研究者の大半がこれを利用しており、さらに新たな短詩や散文も掘り起こされている。⁶⁾本論ではダイヤーの『ローマの廃墟』を取り上げる。

1. 絵画の師リチャードソン

幼い日のダイヤーは事務弁護士の父に命じられて法律を学ぶが、1720年に父が亡くなると、かねてからの念願であった絵画の修行をするべく、ロンドンで高名な肖像画家ジョナサン・リチャードソン (1665-1745) に弟子入りする。リチャードソンは弟子たちを教育するにあたって、絵画の研究と同時に自然の観察や詩歌の鑑賞、さらには聡明な人々との交友を通じた、全人格的な陶冶を強く薦めた。絵画と詩歌の双方に関心を持っていたダイヤーにとって、リチャードソンはまたとない師匠であったといえるだろう。まずは実作者に

して理論家であったリチャードソンの著作に触れてみよう。⁷⁾

リチャードソンは単なる画家にはとどまらず、『絵画論』(1715)、『二篇の講義』(『絵画に関する批評の全体的技術に関する論考』と『目利きの知識のための論考』を収録)(1719)を始めとして、⁸⁾同名の息子と共著で『イタリアの彫像、浅浮雕、素描、絵画の解説』(1722)および『ミルトンの失樂園に関する注釈と意見』(1734)を著すなど、美術ばかりか文学にも強い関心を抱いていた。⁹⁾

サミュエル・ジョンソンは「ダイヤー伝」で、リチャードソンを評して「当時は高名であったが、今では絵画よりも著書でよく知られている画家である」と述べている。¹⁰⁾またジョンソンはリチャードソンの孫弟子にあたる画家ジョシュア・レノルズたちと会食をしていた折に、大学にいた時分にリチャードソンの『絵画論』を偶然見つけて読みふけり、「美術についてこれほど多くを語ることができるとは本当に思えなかった」と発言したという。¹¹⁾また王立美術院の初代院長を務めることになるレノルズも、幼い日々リチャードソンの『絵画論』を読んで、想像力をかき立てられ、画家を志すようになったという。¹²⁾ただしホラス・ウォルポールはリチャードソンを「英国で最高の頭部画家」と評しながらも、彼が「理論に精通し、自分の芸術について深く考察していたのに、頭から下の部分は何も描かず、想像力も欠如していた」と断じている。¹³⁾

リチャードソンの『絵画論』は1715年に発表されたが、本論では増補改訂された第2版(1725)を用いる。¹⁴⁾リチャードソンの絵画理論の中核をなすのは、ホラティウスが『詩論』で掲げた「詩は絵のように」という姉妹芸術の考えであ

る。「絵を描く際の規則は、詩を書く際に守るべき規則とほとんど同じであり、絵画は、詩と同様に、純粋な歴史叙述が行う以上の天才の高揚を必要とする」(19 頁) そのためにリチャードソンは画家を志す者たちに幅広い教養を積むことを勧めており、「画家は詩人、歴史家、数学者などであるばかりか、職人でなければならない」(24 頁)とか、「完成された画家になるために、人は複数の教養科目をものにしなければならない」(33 頁)といった目標が掲げられる。

具体的には「読書や談話によって、他の方法では得られない細部を学ぶことができる。(中略)ミルトンを読んだ後、人は以前よりも優れた目で自然を見るようになり、それまで見過ごされていた美が現われる」(11-12 頁)とあり、「画家は、ホメロス、ミルトン、ウェルギリウス、スペンサー、トゥキュディデス、リウィウス、プルタルコスのような最高の書物を読むべきだが、特に聖書を読むべきである。そこには無尽蔵の泉があり、世界で最も崇高な方法で表現された、最も崇高な思想の大きな多様性がある」(201 頁)とリチャードソンは説く。ちなみに『絵画論』の 25 年版に追加した「崇高について」という章(226-265 頁)で、リチャードソンはロンギヌスやボワローに触れながら、シェイクスピアやミルトンからふんだんに引用している。

ダイヤーは「ある高名な画家に宛てた書簡詩」でリチャードソンに「我が心の喜ばしい仲間、最も美しい芸術の師よ」(1-2 行)と呼びかけ、以下のように師匠を讃えている。¹⁵⁾

私に汝の神々しい芸術を明らかにし、
私に汝の奥義を分け与えたまえ。
まだ私は韻文でしか描けず、
理想を前にして色彩はかすれる、
開かれた眼に汝が見せるものは、
自然の生き生きした輝きに見える。

(18-23 行)

ウィリアムズによれば、ダイヤーの備忘録には、

ミルトンの『失樂園』、スペンサーの『妖精の女王』、ウェルギリウスの「ブヨ」、聖書からの抜き書きが記されているという。¹⁶⁾ 師匠の教えを忠実に守ろうとする弟子の姿がまざまざと見えてくる。

またリチャードソンは、ラファエロがジュリオ・ロマーノ、ティツィアーノ、ルーベンス、ヴァン・ダイクらと交友を結んでいた例をあげ、「画家は最も聡明な仲間と行き来し、他の者は避けるべきである」(202 頁)と述べ、さらに絵画や彫刻における最高の巨匠の作品を、画家の日々の糧にすべきだと教示する。

師の教えに倣ったかどうかは不明だが、ダイヤーは当時の文壇で一大勢力であったアーロン・ヒルを中心とする文人グループに接近した。そのメンバーにはリチャード・サヴェイジ、ジェイムズ・トムソン、ディヴィッド・マレット、ジョウゼフ・ミッチェルなどがおり、「クリオ」ことマーシャ・フォークスは詩人たちの詩神とでもいうべき存在であった。¹⁷⁾ 彼らの交流を最も顕著に表わしているのがサヴェイジの編集した『雑詩集と翻訳』(1726) で、ダイヤーもピンダロス風オード版の「グロンガーの丘」を始めとする 6 篇を寄稿しているが、その中にはリチャードソン、ヒル、サヴェイジに宛てた書簡詩が含まれており、逆にヒル、サヴェイジ、クリオからダイヤーに宛てた書簡詩も収められている。例としてクリオが書いた「カーマゼンシャーのジョン・ダイヤー氏に」から一節を引く。¹⁸⁾

歌い続けよ、ささやかな不安に妨害されずに、
汝の詩と絵筆が結び合って報酬を強要する。
汝の主張は、二重の花輪で、月桂樹を要求し、
汝の詩は照らし出し、汝の絵は息づいている。

(11-14 行)

美術と文学をともに修めるべきだというリチャードソンの理念は、他の著作でも同様に披歴されており、『絵画に関する批評の全体的技術に関する論考』には「画家は歴史家、詩人、哲学者、聖職者として十分に考え、さらに画家として自分

の芸術のあらゆる利点を賢く利用し、その欠点を補うための方法を見つけなければならない」(27-8 頁)とあり、『目利きの知識のための論考』には「絵画は別の種類の著作である」(13 頁)と記されている。さらにリチャードソンは『ミルトンの失樂園に関する注釈と意見』に収めた「ミルトン伝」において「私は幼時から絵画と詩歌を愛し、実践してきた。絵画を妻として所有し、詩歌を秘かに囲ってきたし、生涯にわたってそうしていくつもりだ」(178 頁)と告白している。彼の詩作は『朝の想い』(1776)としてまとめられた。¹⁹⁾

リチャードソンがこれらの著作で目指したのは、当時の英国で必ずしも高い評価を得ていなかった美術の隆盛をもたらし、絵画や素描を文学や音楽と同様の地位にまで引き上げることであった。そのために彼は画家になろうとする若者を育てるとともに、美術作品を正当に鑑賞し評価できる「目利き」(Connoisseur)を養成することを自らの使命としたのである。リチャードソンは『絵画論』で「建築についてはイニゴ・ジョーンズ、演劇についてはシェイクスピア、叙事詩についてはミルトン」(223 頁)が古代人に劣らぬ地位を築いていると述べた後で、「絵画における古代の偉大で美しい趣味が復活するとしたら、それは英国であろう」(224-5 頁)と宣言し、若い画家たちが古今東西の偉大な巨匠に匹敵するような日が来ることを待ち望むと締めくくる。

リチャードソンの『イタリアの彫像、浅浮雕、素描、絵画の解説』は、彼の息子がイタリアの各都市で絵画や彫刻を観察した印象を簡潔にまとめたメモに、父親が加筆修正したものとされる。索引には都市ごとに訪れるべき教会や美術館が記され、同時に画家別の作品目録も添えられていて、イタリアを旅行する英国人にとって一種のガイドブックになったことは想像に難くない。リチャードソンは序文でイタリアを「ヨーロッパで最も考慮すべき土地の一つ」(viii 頁)と呼び、英国にもイタリア絵画の複製画はあるが、それは地図に書かれた町の名前のようなもので、実物のイメージを捉えるには不十分であるとして、現地で本物

を見ることを勧めた。

リチャードソンのこのような薫陶を受けたダイヤーは、1723 年に同好の士たちと語らって「ローマン・クラブ」なる親睦団体を結成した。そのメンバーは、後に画商として名を馳せるアーサー・ポンド、リチャードソンの弟子であったジョージ・ナプトン、その縁者チャールズ・ナプトン、ケンブリッジ大学の学生ダニエル・レイ、法廷弁護士で後にソネット詩人として知られるようになるトマス・エドワーズであった。後述するように、このうちレイとエドワーズは、ダイヤーの『ローマの廃墟』について文学上のアドヴァイスを行ったばかりか、この作品の出版について尽力した。リピンコットの表現を借りれば、「ローマン・クラブ」の若者たちに共通する理念は「イタリアの古典主義への愛、美術と文学の世界で輝きたいという欲望」であった。²⁰⁾ 彼らは画家や美術の目利きたらんとして陸続とイタリアの地を目指し、ダイヤーも 1724 年から翌年にかけてイタリアで絵画修行に勤しむことになる。

(2) イタリアの印象

ダイヤーは英国から海路でイタリアを目指したが、貴顕の贅沢なグランド・ツアーとは異なり、懐のさびしい彼の旅行はあまり楽しいものではなかったようである。彼の「逃亡日誌」には「イタリアへの航海の途中、プリマス港のひとつカルウォーターで嵐から辛うじて逃れる」とある。²¹⁾ ミードは「大陸を訪れる旅行者の大半は、少なくとも英仏海峡か北海を渡るが、ジブラルタル海峡を抜けてイタリアに向かう長い航海をする人は比較的少ない。そうしなかったのは幸いだった。船は小さくて汚く、食事はまずく、天候はしばしば荒れ、最悪の場合、海賊に捕まって投獄されるという長い伝統があった」と述べている。²²⁾ 海上ではないが、ダイヤーの「逃亡日誌」には 1725 年に「バイアエで廃墟に巣くっている山賊から辛うじて逃れる」とある。

イタリアにおけるダイヤーの生活も快適なもの

ではなかったようである。友人（特定されず）に宛てた手紙には彼の葛藤が記されている。²³⁾

今はローマにある遺跡をめぐって、とてもたくさん描いている。だがこのような熱心な楽しみにもかかわらず、私はいつも自分を支えることができず、交友がないためにしばしば憂鬱に沈む。私は君の不在をととても不安な思いで考え、そのために私は何度も夜になると英国に帰ろうと決心し、翌朝にはキャピトルやアヴェンティノーで憂さ晴らしをしている。

ダイヤーはどこかの酒宴に潜り込んでみたものの、ローマでの生活を堪能している他の者たちと打ち解けることができなかつたと漏らし、イタリア人の間で貧富の差が甚だしいことに憤慨し、カトリックの儀式や式典、聖職者たちのふるまいに強い嫌悪を示している。「サン・ピエトロ大聖堂で書かれた」と題された短詩から引く。²⁴⁾

我らは誰も墮落した罪人だが、この者たちは
同胞の不幸の上に高位を築いている。
彼らは汝（神）の柔和で忍耐強い生き方を、
自らの行いの手本とすることを拒むが、宗教の
僧服を身につけている。偽善者どもだ。

(2-6 行)

また「断片」にもカトリックのミサに参列した際の不快感が記されている。²⁵⁾

聞き覚えのない歌に耳を傾け、
物音を恐れ、聞き耳を立てていると、
白衣の修道士が堂々として来る、
ふんぞり返り、三重になった顎をして。
騒々しい足取りで、見苦しく、不揃いに歩き、
非常に肉付きの良い顔をしていた。

(1-6 行)

またウェールズの緑豊かな自然の中で育ったダイヤーは、詩歌で慣れ親しんできたイタリアの自然を実際に目にとると、失望の念を禁じえなかつ

た。²⁶⁾

古代ローマの寺院、水道橋、円形劇場、凱旋門、彫像などの遺跡は、私の期待以上のものだった。だが詩人たちの歌では実に魅力的に見えた国土の表面や山や川にはがっかりした。山はむき出しで、川は小さく濁っている。

ダイヤーはこのような不満を抱きつつも、ローマを拠点としながらイタリア各地で絵画の修業に明け暮れた。特に誰かを師匠とすることもなく、種々の建造物や浅浮雕や彫像などをスケッチして回り、パンテオン、円形闘技場、カラカラ帝の大浴場など、古代ローマの遺跡はダイヤーを感動させた。²⁷⁾

廃墟の丘をめぐり、聖なる道に沿って建つアーチをくぐり抜けるとき、私は少なからず熱くなり、頭の中にたくさんの詩が浮かんでくる。時の推移によって生じたある種の魅力があり、凱旋門は過去よりも現在のほうが美しくなっていると思わざるを得ない。緑が全体に広がって、さまざまな他の色もあり、石組みは崩れて朽ち果て、雑草やテンニンカの茂みには、えも言われぬ快さがあり、すべてが実に荒々しく一体となって芸術と混ざり合い、不快な四角や角の痕跡が跡形もなく削り取られ、以前には想像もできなかったような美しさが加わり、現代の建物では味わえない驚きを引き起こしてくれる。

この手紙には時を経た廃墟の魅力に惹かれるダイヤーの心情が素直に表現されているが、彼の称賛は同様に無数の彫刻群にも向けられる。²⁸⁾

彫像や浅浮雕を見に訪れることは実に楽しみだ。ほとんど日課も同然で、喜びはますます大きくなっていく。ニコラ・プッサンが好んだのもうなずけるし、ラファエロも古代人に比べれば取るに足らない。ヘラクレス像には大いなる力強さと気高い筋肉が、アポロン像には大いなる優美さと偉大さと穏やかさがあり、メディチ家のヴィーナス像には大いなる繊細

さと完璧な均整があり、ラオコーン像にはどこを取ってみても現代人が模倣しえない大いなる精妙さがある。

だが「イタリアのオクリクルムで書かれた」と題された詩には、また別の感懐も込められている。遺跡をスケッチしていたダイヤーとおぼしき語り手の前に、どこからともなく予言者のような幻が現われて世の無常を説く。²⁹⁾

今も時の歩みは汝の足元にあり、
汝と、汝の絵画と、汝の豎琴は、
あっさりと一掃される。まわりを見るがいい、
万物が侵食する歳月にその姿を委ねるのだ。

(33-6 行)

ダイヤーは朽ち果てた遺跡に独特の美を見出しながらも、栄華を誇った大帝国がついには滅びたように、自分が苦勞して描いた絵画や、まだ習作の域を出ない詩歌も永続することはないと慨嘆する。このように相反する感情がやがて『ローマの廃墟』に結実していくことになる。

ウィルモットによれば、ダイヤーの「健康は決して強壯ではなかったが、カンパーニヤの空気によって大きく損なわれた」こともあって、³⁰⁾ 彼はわずか 1 年あまりのイタリア滞在を切り上げて英国に戻ることになる。さらに帰国後のダイヤーは「都会生活を楽しむことも、自分の職業に求められる勤勉さに耐えることもできない」ことに気づき、ロンドンを離れて田舎で暮らすことを決断した。やがてダイヤーは友人たちの勧めに従って聖職に就き、各地の牧師館で任についた。³¹⁾

(3) 『ローマの廃墟』

ダイヤーは 1729 年頃に『ローマの廃墟』の草稿を書き始めたようだが、³²⁾ 執筆はなかなか思うようにはかどらなかった。ウィリアムズによれば、ダイヤーは「ローマン・クラブ」のメンバーであったエドワーズとレイ、さらには詩人アイザック・

ホーキンズ・ブラウンなどの助言を受けて改訂を繰り返し、ようやく出版に漕ぎつけたのは 1740 年のことであった。³³⁾

『ローマの廃墟』はミルトンばりのブランク・ヴァースで書かれた 545 行からなる長詩で、「ローマン・クラブ」のメンバーに捧げられた。³⁴⁾ エピグラフには新ラテン詩人ヤヌス・ウィターリスのソネットの一部が掲げられている。

荒廃の力で朽ち果てた広大な劇場や、
石積みの崩れた城壁を見るがいい。
それがローマである。かく残骸と化した都市が、
今も荘厳な風情を湛え、脅威を与えるのが見えるか。

この作品には詩人の名が記されていないが、冒頭で「グロンガーやマーリンの伝説的な棲処、蛇行するタウィ川の本蔭なす谷間は十分に、誉れもなく歌った」(1-3 行)とあり、ダイヤーは自ら種明かしをしてみせる。彼は今やウェールズという主題を放棄して、「抗いがたい主題、帝政ローマ」(15 行)を歌うことを宣言する。

崩れ、崩れた、沈黙の瓦礫。英雄たちはみな
骨壺の中に眠っている。壮麗なる誇りを見よ、
国々の玉座は倒れ、塵の中に埋もれてはいるが、
今もなおも堂々としている。荘厳なる情景は
魂を高揚させるのだ、また今や昇りゆく太陽は
廃墟を見下ろし、澄んだ大空に燃えて、
きらめきを放つ平野の上に高々と聳えている、
崩れ落ちた岩のごとく、広大な円周を形作り、
裂けた宮殿、潰れた円柱、割れた岩塊、神殿
また神殿が転がり、墳墓が重なって埋もれている。

(16-25 行)

かつて比類ない栄華を誇った帝国も瓦解し、壮麗な建造物も今は崩れ落ちて見る影もない。英雄たちも永遠の眠りにつき、一面が死の世界と化している。ただ太陽だけが往時と変わることなく、廃墟となった光景を照らし出す。しかし詩人は朽ち果てた現前の眺めに「荘厳」を感じ、彼の魂は

高揚するのである。さらに廃墟は「荘厳」に映るばかりではなく、「恐怖」も呼び起こす。

…巡礼者はたびたび、
静まり返った真夜中、祈りを捧げる間に、
時の声を耳にして仰天する、剥離した塔が
粉塵を上げながら真逆様に転げ落ちて、
周囲に轟音を立て、月にまで雷鳴を響かせる。

(38-42 行)

ジョンソン博士は「ダイヤー伝」で、この作品の「発想は読者を感じさせるが、楽しませることは少なく、題名が大きな期待を抱かせるが、出来栄は満足させるには至らない」と手厳しいが、この詩行については例外として「詩人の心で着想されたもの」であると褒めている。³⁵⁾ 地上にある瓦礫と同様に、地中に埋もれていた遺跡も地崩れによって顔を覗かせるが、これもまた見る者の心を震撼とさせる。

沈んだ地面が恐ろしい裂け目で私を驚かせ、
山の胎内にある、側廊や広間の広大な
深淵から闇を吐き出しているのだ。

(57-9 行)

このようにダイヤーの提示する古跡の描写には、畏怖や恐怖を湧き起こす「崇高」を思わせるものが少なくない。だがローマ滞在中の手紙に見られたように、時を経たことによって往時とは異なる美しさを醸し出している風景もある。以下の描写においてダイヤーは、廃墟と自然が混然一体となることによって生じる、古代にはありえなかった新たな美を発見している。

風通しの良い丘を越え、きらめく波を
織りなして、耳に快く流れる、澄んだ泉の畔、
なめらかな小石、曇りのない瑪瑙、
空色の輝緑岩、まばゆい碧玉の
華やかな脈の間を、喜びながら私は移動する、
浮き出し模様のついた壺や、巨大な石碑、

互いに絡み合う葡萄や、象られたニンフたち、
うるわしく成形されたフローラやクロエが、
闇を活気づけている。深々とした空っぽの墳墓、
小さな谷間、時とともに荒れ果て、ひなびて、
緑に包まれ、朽ち果てた神殿、傾いだ塔の
歪んだ裂け目から飛び出て、一面を覆い隠す木蔭、
荘厳な荒廃というべきか。

(74-86 行)

次々と古跡を辿って美的感覚を満足させてきた詩人は、やがてスキピオ、マリウス、ポンペイウス、カエサル、ブルータス、キケロなど偉人たちの彫像や胸像を見るにつけ、古代ローマの繁栄と没落に思いを馳せていく。幾多の血なまぐさい戦闘を経てローマは建国されるに至った。これに刺激されたダイヤーは母国たる英国のために自らも尽くそうと決意を語る。さらに彼はパラティーノの丘からポルチコやドーム、オベリスクや円柱が聳えるローマの威容を眺めて感嘆する。これは「グロンガーの丘」と同じ眺望詩の様式と言えるだろう。ダイヤーは円形競技場の途方もない大きさを目を見張り、優美な造りのパンテオンに感嘆する。彼がローマ滞在中に兄のロバートに宛てた手紙にも似た感懐が記されている。³⁶⁾

円形競技場も称賛に値し、パンテオンと同じぐらい感動したが、その様式はまったく異なっている。一方はその美しさを大きく均等なうねりとして湾曲させ、目を楽しませてくれるが、他方はその円を徐々に広げながら視線を移動させ、半天の広い視野に目を委ねるのである。

ただし円形競技場を描いた詩行には、支配欲に酔いしれて野蛮な快楽を好むようになったローマ人が、ライオンや虎、狼や象、さらには自暴自棄になった人間が殺し合う惨劇を喜んで見物し、断末魔を聞きながらも無感覚でいられたと非難する一節がある。ローマ滞在から十数年を経て、ダイヤーの評価に変化が生じていることが分かる。

ダイヤーはローマの国家転覆を謀った反逆者カ

ティリーナに触れた後に、女神「自由」に対して英国を守りたまえと祈り、かつて「自由」の恩恵を受けたユダ、ティルス、シドン、リビア、ギリシア、そしてローマといった国々を列挙していく。この一節はトムソンの『自由』などに顕著に表われているように、女神「自由」が西進北上を経て最終的に英国に終の棲家を見つけるという「進歩詩」の主題に倣ったものである。もっとも他の詩人たちはダイヤーが挙げた古代の国々に触れたことがない。先にダイヤーはパラティーノの丘から見たローマの繁栄を描きながら、その反面で没落したギリシアで「澄んだイリッサスは、声の絶えた学堂や、詩人や賢者が訪れなくなった森を嘆き悲しむ」（144-5 行）と付言していたが、これも同じ趣向である。

このあたりからダイヤーは帝政ローマの誉れと墮落の間で揺れ動いていく。「自由」がローマを加護していた頃には、飢餓ともなれば公共の穀物蔵から貧者たちに援助が施され、導水橋が荒地の至る所に水を配給した。鍛え上げられた若者たちが戦場で勝利を得ると数多の凱旋門や円柱が建てられ、山を貫き、谷を乗り越え、遠くの海に至るまで歩道が造られていった。だがネロのような暴君が現われるや、町は大火災に包まれて焼失し、そこでは今や羊飼いたちが羊に向かって葦笛を吹き鳴らしている。傲慢な者たちもやがては塵に戻る定めにあるのだ。

皇帝や、英雄や、農民や、隠者たちが、塵となって
ひとつに混じりあって眠るのだ。奴隷たちは
数々の苦役から解放され、傲岸不遜な者たちも
権力を断念し、守銭奴は蓄えた財産を手放す。
そこに人間の愚かさが眠る。

(341-5 行)

続いてダイヤーはエスキリヌスの丘にあるウェルギリウスの住居跡を訪れる。そこには飾り気のない壁が残っているだけで、ひどく荒れ果てているが、瓢箪とオリーブが屋根のように編み合わさって、房をつけた葡萄も垂れ下がっている。

ここで柔和で善良な男、高遠なる詩人は、
神々しい歌を作り上げ、ホラティウスや
全世界の支配者と打ち解け合って歩いた。
幸福なアウグストゥス、汝は強い靈感を受けて、
自らの栄華と王たる尊厳を脇に投げ捨てると、
偉大なる魂、賢者の声に耳を傾け、精神を
高められたのだ。詩神たちにとってめでたく、
いとも輝かしき日々であった。

(379-86 行)

激しい内乱を平定してローマ帝国の初代皇帝となったアウグストゥスと側近のマエケーナスが、詩人たちのパトロンであったことは言うまでもない。当時は戦乱に明け暮れる野蛮な種族や粗野な農民たちも、詩人の名を崇敬した良き時代であった。翻ってダイヤーは「我々の時代はそうではない」（392 行）と嘆息する。心労によって詩人は翼を失い、自然の豊饒さは閉ざされ、人間同士が相争い、喉の渇いた巡礼者が泉水を求めても得られないからだ。最後の表現は詩的靈感の枯渇と読み替えることもできるであろうが、ダイヤーは「もう十分だ。不平はやめよう」（398 行）と急にこの話題を打ち切って、古代ローマの歴史に戻っていく。

ロムルスとレムスによって建国されたローマは、やがて急速な発展を遂げ、周囲の国々を属国化して肥大していった。カルタゴを打ち破り、ギリシアから覇権を奪い、傲慢なまでの平和を勝ちとった結果、ローマは安楽と官能に溺れて墮落していく。ローマ市民の肉体と精神は脆弱になり、大浴場や別荘が建てられ、食卓には各地の珍味が並び、賄賂や欺瞞や暴力が横行する。最後には「自由」が失われたために、暴君による支配が行きわたっていく。ダイヤーは英国人にこう警告する。

英国人よ、我が同胞よ、用心するがいい、
気を引き締めよ、ローマ人はかつて自由だった、
勇敢であり、徳篤き人々だった。だが暴政が
しばし壮麗な行列をなして御自ら歩み出し、
放縦な快楽で群れ集う大衆を満たしてやった、

思慮なき衆生だ。

(511-6 行)

ここでダイヤーが歌っているのは、「自由」を手放した古代ローマの腐敗と墮落であるが、グランド・ツアーでイタリアを訪れたアディソンやトムソンも、ダイヤーとほぼ同じ主張をしている。アディソンは「イタリアからの手紙」(1701)で「高慢な抑圧がイタリアの谷間を支配し、暴君が幸福な平野を篡奪している」(111-2 行)と述べる一方で、英国は「自由」に向けて「女神よ、英国の島は汝を崇めている」(127 行)と断言する。37) またトムソンは『自由』の第1部「古代と現代のイタリア比較」(1735)で、女神たる「自由」に現代のイタリア人に対する義憤をこう語らせている。³⁸⁾

今の彼らを見るがいい、すべてに屈従した
薄っぺらな絶望した者たち、奴隷の中の奴隷、
迷信に騙され、悪徳と放縦な法律に去勢され、
欺瞞に長け、殺人に勇敢な者と成り下がった。
この同じ美しい国に、そのような者たちがおり、
かつては私のものであったが、今は圧制の子だ。

(222-7 行)

さらに「自由」は英国人と思しき語り手に論ず。

ここから学べ、かつては人間全体の支配者であった
英雄的な種族が、かくも悲惨な状態に陥るならば、
私を奪われた時に、英国もいかに嘆かわしい運命を
迎えることになるだろうか。

(322-5 行)

これら3篇の詩はいずれもムアの説く「ホイッグ称賛詩」の特徴を備えている。これは対外戦争も辞すことなく、国内の商工業や世界各地との交易を推進することで英国の繁栄を招来し、英国を「自由」の終の棲家と考える、18世紀前半に顕著に見られる詩作品を指す。ムアは英国の毛織物産業を主題にしたダイヤーの農耕詩『羊毛』を「ホ

イッグ称賛詩」のひとつの頂点に数えているが、³⁹⁾『ローマの廃墟』にもその片鱗は既にうかがわれるのである。

ダイヤーは『ローマの廃墟』の掉尾で、ローマ帝国が北方の蛮族の侵入を受けて滅亡したことを語り、「豪奢」こそが国家の破滅のもとであり、過去に栄華を誇った大帝国もすべて「豪奢」に溺れたがゆえに滅び、廃墟に化したと結論づける。

…汝[豪奢]の背後では底の知れない

深淵が口を開けている、そこにアッシュールは

飲み込まれ、忘れ去られた、傲慢きわまりない

タタール、栄華を誇ったエラム、美しいギリシア、

地上の大いなる女王、ローマ帝国もまた然り。

(548-52 行)

この作品においてダイヤーは、古代ローマの滅亡を反面教師として現代の英国に警告を発している。ローマ滞在中に書かれた「イタリアのオクリクルムで書かれた」にもある種の無常感が漂っていたことは既に述べたが、そこでは自らの絵画や詩が永続することはないという不安が表明されていた。ただし「自由」や「豪奢」についてはまったく触れられていないのである。ホイッグ称賛詩」の特徴は帰国後の推敲によって付加されたものと考えたほうがよい。荒れ果てた自然と混然一体となったローマの廃墟に見出した新たな美こそ、ダイヤーがイタリア留学でつかみ取った美的感性なのである。

注

- (1) John Dyer, “Grongar Hill,” *Miscellaneous Poems and Translations. by several Hands.* ed. Richard Savage (London: Samuel Chapman, 1726) 60-66.
- (2) John Dyer, “Grongar Hill,” *Miscellaneous Poems by Several hands*, ed. D. Lewis (London: J. Watts, 1726) 223-231.
- (3) Poems by John Dyer, L.L.B. (London: R. & J.

- Dodsley, 1761) 9-16.
- (4) John Dyer, *The Ruins of Rome. A Poem.* (London: Lawton Gilliver, 1740)
- (5) John Dyer, *The Fleece: A Poem. In Four Books* (London: R. & J. Dodsley, 1757)
- (6) William Hylton (Dyer) Longstaffe, "Notes on the Life and Writings of John Dyer, the Poet," *The Patrician* 4 (1847) 7-12, 264-8, 420-6. *The Patrician* 5 (1848) 75-81, 218-23. ロングスタッフの公開した資料は以下の書物に採録されている。 *The Poetical Works of Mark Akenside and John Dyer*, ed. Robert Aris Willmott (London: George Routledge, 1855), John Dyer, *Selected Poetry and Prose*, ed. John Goodridge (Nottingham: Trent Editions, 2000)
- (7) リチャードソンの絵画理論については以下参照。
Samuel H. Monk, *The Sublime: A Study of Critical Theories in XVIII-Century England* (1935; Ann Arbor, 1960) 174-8., Lawrence Lipking, *The Ordering of the Arts in Eighteenth-Century England* (Princeton: Princeton University Press, 1970) 109-26., Leon Guilhamet, *The Sincere Ideal: Studies on Sincerity in Eighteenth-Century English Literature* (Montreal: McGill-Queen's University Press, 1974) 151-61., Richard Wendorf, *The Elements of Life: Biography and Portrait -Painting in Stuart and Georgian England* (Oxford: Clarendon Press, 1990) 136-50.
- (8) Jonathan Richardson, *An Essay on the Theory of Painting*, (London: W. Bowyer, 1715), Two Discourses (London: W. Churchill, 1719)
- (9) Jonathan Richardson, Sen. & Jun., *An Account of some of the Statues, Bas-Reliefs, Drawings and Pictures in Italy, &c. with Remarks* (London: J. Knapton, 1722), *Explanatory Notes and Remarks on Milton's Paradise Lost* (London: James John & Paul Knapton, 1734)
- (10) Samuel Johnson, "Dyer," *The Lives of the most Eminent English Poets; with Critical Observations on their Works*, ed. Roger Lonsdale, 4vols (Oxford: Clarendon Press, 2006) 4: 124.
- (11) James Northcote, *The Life of Sir Joshua Reynolds*, 2vols (London: Henry Colburn, 1810) 1: 235-6.
- (12) Northcote, 1: 14.
- (13) Horace Walpole, *Anecdotes of Painting in England*, 4vols (Strawberry-Hill, 1771) 4: 15.
- (14) Jonathan Richardson, *An Essay on the Theory of Painting*, 2nd ed. (London: A. C., 1725)
- (15) John Dyer, "An Epistle to a Famous Painter," *Selected Poetry and Prose*, 32-3. 初出は Savage の *Miscellaneous Poems and Translations*, 102-6.
- (16) Ralph M. Williams, *Poet, Painter, and Parson: The Life of John Dyer* (New York: Bookman Associates, 1956) 35. n. 8.
- (17) ヒルのサークルについては Dorothy Brewster, *Aaron Hill: Poet, Dramatist, Projector* (New York: Columbia University Press, 1913), Chrisitine Gerrard, *Aaron Hill: The Muse's Projector 1685-1750* (Oxford: Oxford University Press, 2005) を参照。
- (18) Clio, "To Mr. John Dyer, of Carmarthenshire," *Miscellaneous Poems and Translations*, 209-10.
- (19) Roger Lonsdale, "Jonathan Richardson's Morning Thoughts," *Augustan Studies: Essays in honor of Irvin Ehrenpreis*, eds. Douglad Lane Patey & Timothy Keegan (Newark: University of Delaware Press, 1985) 175-94.
- (20) Louise Lippincott, *Selling Art in Georgian London: The Rise of Arthur Pond* (New Haven: Yale University Press, 1983) 19-20.
- (21) John Dyer, "The Journal of Escapes," *Selected Poetry and Prose*, 3.

- (22) William Edward Mead, *The Grand Tour in the Eighteenth Century* (Boston & New York, Houghton Mifflin, 1914) 142-3.
- (23) *Selected Poetry and Prose*, 18.
- (24) John Dyer, "Wrote at St. Peter's," *Selected Poetry and Prose*, 21.
- (25) John Dyer, "Fragment: While to the unstudied lay I leaned my ear," *Selected Poetry and Prose*, 20.
- (26) *The Poetical Works of Mark Akenside and John Dyer*, 25.
- (27) *Selected Poetry and Prose*, 22.
- (28) *Selected Poetry and Prose*, 18.
- (29) John Dyer, "Wrote at Oriculum in Italy," *Selected Poetry and Prose*, 23-6.
- (30) *The Poetical Works of Mark Akenside and John Dyer*, xiii.
- (31) *Poems by John Dyer, L.L.B. advertisement*. iii-iv.
- (32) *The Poetical Works of Mark Akenside and John Dyer*, 23.
- (33) Ralph M. Williams, "The Publication of Dyer's Ruins of Rome," *Modern Philology* 44 (1946) 97-101.
- (34) *Selected Poetry and Prose*, 18.
- (35) 『ローマの遺跡』については以下の論考がある。John Scott, *Critical Essays on Some of the Poems, of Several English Poets* (London: James Philips, 1785) 113-52., Laurence Goldstein, *Ruins and Empire: The Evolution of a Theme in Augustan and Romantic Literature* (Pittsburgh: University of Pittsburgh Press, 1977) 25-42., Anne Janowitz, *England's Ruins: Poetic Purpose and the National Landscape* (Oxford: Basil Blackwell, 1990) 30-40., Suvir Kaul, *Poems of Nation, Anthems of Empire: English Verse in the Long Eighteenth Century* (Charlottesville, University Press of Virginia, 2000) 102-12., Bruce C. Swaffield, *Rising from the Ruins: Roman Antiquities in Neoclassic Literature* (New Castle upon Tyne: Cambridge Scholars, 2009) 34-48.
- (36) Samuel Johnson, "Dyer," 4: 125.
- (37) Joseph Addison, "A Letter from Italy," *The Works of the Right Honourable Joseph Addison*, ed. Richard Hurd, 6vols (London: Henry G. Bohn, 1856) 1: 36.
- (38) James Thomson, *Liberty, The Castle of Indolence and Other Poems*, ed. James Sambrook (Oxford: Clarendon Press, 1986) 49, 52.
- (39) Cecil A. Moore, "Whig Panegyric Verse: A Phase of Sentimentalism," *Backgrounds of English Literature 1700-1760* (Minneapolis: The University of Minneapolis Press, 1953) 104-44.